

問22 (オリジナル)**文章理解****空欄補充 講義問題**

次の文の空欄に入る文として最も適当なものはどれか。

ヨーロッパ式の庭園は、左右相称で、幾何学的図形をなしている花壇や、やはり幾何学的図形を石組で作り出し、中央に噴水を出した泉水や、丸く刈り込んだ樹木や大理石その他の彫刻を置いた、よく手入れされた芝生など、人間の造型意志をはっきり示しているところに特色がある。それは最初に設計した人の手を離れた時、一つの完成に達しているのであって、その後手入れさえ施していればそのまま最初の形を保持して行くことが出来ると考えた。

庭園において動かない造型を作り出すということは、彫刻や絵画や建築や、ヨーロッパ流の藝術理念を作り出しているそれらのジャンルに準じて、庭園も考えられているということである。

ところが、日本では作庭をも含めて、ことに中世期にその理念を確立したもろもろの藝術——たとえば茶や生花や連歌・俳諧など——においては、永遠不変の造型を願わないばかりか、一瞬の生命の示現を果したあとは、むしろ消え去ることを志向している。不変とは、ピンで刺した揚羽蝶の標本のように、そのまま死を意味する。それに反して変化こそ、生なのである。西洋の多くの藝術が志向するものが永遠に変ることのない、美しい堅固な形であるなら、日本のある種の藝術が志向するものは移って止まぬ生命的輝きなのである。生命が日本の藝術、この場合は日本の庭の、根本に存在する標しなのだ。

私はそれら日本の藝術家たちに、自分の作品を永遠に残そうという願いが、本当にあったかどうかを疑う。ヨーロッパ流の藝術觀では、藝術とは自然を素材にして、それに人工を加えることで完成に達せしめられた永遠的存在なのだから、造型し構成し変容せしめようという意志がきわめて強い。それが藝術家の自負するに足る創造であって、それによって象徴的に、彼等自身が永生への望みを達するのである。

造型意志が極端に弱いのが、日本の藝術である。日本における美の使徒たちに、そのような意志が微弱にしか育たなかつたのは、やはり日本人が堅固な石の家にでなく、壊れやすく朽ちやすく燃えやすい木の家に住んでいることに由来しているかも知れない。彼等は自分たちの生のあかしとしての造型物を、後世に残そうなどとは心がけなかった。

造型ではなく、花の命を惜しむことが、生花の極意である。

- 1 たとえば、生花は創造の一種と言える。その生命をいかに保存し永世の保持を試みることこそ生花の目的ではなかつたか。我々は花のはかなさゆえにそのことをわすれがちだが、命を惜しみながら永世の保持を祈念してこそ華道の極意があると言える。造型の意志が極端に低いとは言え、やはり花の命を惜しみながらそれを創造してこそ、花の命の藝術と言えるのである。
- 2 たとえば、生花とはたしかに造型なのか。しかし、たとえそこにいくらかの造型的要素があつたとしても、それが生花の目的とはいいがたい。たしかに彫刻や絵画が永遠の造型を目指している点で、生花もこれらと同じ芸術であるが、生花は日本古来の自然観に基づく点で明らかに彫刻や絵画と異なる。彫刻や絵画が人工的な美を求めるのに対して、生花は自然の美を求めるのである。
- 3 たとえば、たしかに生花とは造型の一種と言えるが、たとえそこにいくらかの造型的要素があつたとしても、自然の移り変わりを楽しむ点で、彫刻や絵画と異なる。生花はその作法的な厳格さがヨーロッパのとは明らかに違い、自然に人工を加える自然信仰のあらわれと言える。永遠を願う点はヨーロッパの藝術理念と同じであるが、散るからこそ花は美しく、藝術家の願いむなしくそこに生きた花の短い命との永遠の別れでこの藝術は終止する。
- 4 たとえば、生花とは造型なのか。たとえそこにいくらかの造型的要素があつたとしても、それが生花の生命であり、目標であるのか。馬鹿らしい。彫刻や絵画が永遠の造型を目指しているのに、花というはかない素材で何を造型しうるというのか。一ときの美しさを誇ってたちまち花は散るのである。散るからこそ花は美しく、そこに生きた花の短い命との一期の出会いを愛惜することが出来る。

5 たとえば、生花とは造型なのか。年々の華道家が造型の意志をもって生花に携わってきた点は否定できないが、自然を自然のまま残そうという意志がそこには見え隠れする。ヨーロッパの藝術も自然と一体化し、はかなさを模索している点では日本の藝術と似ているが、ヨーロッパの藝術は人工物が後世に残らぬように終わらせる世界の藝術家共通の目的を達成できなかった点で、日本の藝術には及ばない。

■■〔正解〕 4 ■■

出典 「日本の庭について」 山本健吉 講談社

1 設問形式の確認

設問形式は空欄補充である。空欄は一つで、そこに適する具体例をいれる形式であった。論旨から適する具体例を入れられるかが鍵になる。

2 本文読解

〈ヨーロッパの芸術理念〉

「人間の造型意志をはっきり示しているところに特色がある」

=

「庭園において動かない造型を作り出すということは、彫刻や絵画や建築や、ヨーロッパ流の藝術理念を作り出している」



〈日本の藝術理念〉

「私はそれら日本の芸術家たちに、自分の作品を永遠に残そうという願いが、本当にあったかどうかを疑う」

=

「造型意志が極端に弱いのが、日本の藝術である」

以上から、「ヨーロッパの芸術理念は造形的意志が強い」のに対して、「日本の藝術理念は造形的意志が極端に低い」という対比構造になっていることがわかる。

3 空欄前後の検討

空欄の前の文に「彼等は自分たちの生のあかしとしての造型物を、後世に残そうなどとは心がけなかった」とあり、選択肢の1～5の全てが「たとえ

ば」から始まっている点から、「造型的意志が極端に低い日本の芸術」の具体例が入ることがわかる。

4 選択肢の検討

□□ 1 ×

「その生命をいかに保存し永世の保持を試みることこそ生花の目的」とあるが、これはヨーロッパの芸術理念である。

□□ 2 ×

「たしかに彫刻や絵画が永遠の造型を目指している点で、生花もこれらと同じ芸術である」とあるが、これも1と同様、ヨーロッパの芸術理念である。

□□ 3 ×

「生花はその作法的な厳格さがヨーロッパのとは明らかに違い」とあるが、本文では作法的な厳格さの比較がない。また、「永遠を願う点はヨーロッパの芸術理念と同じである」は1、2同様、ヨーロッパのみの芸術理念であり、日本の芸術理念は当てはまらない。

□□ 4 ○

日本の芸術理念に合致した具体例と言える。

□□ 5 ×

「ヨーロッパの藝術も自然と一体化し、はかなさを模索している点では日本の藝術と似ている」とあるが、本文では「ヨーロッパの藝術は造型意志が強い」ことが言及されており、「そのまま最初の形を保持して行くことが出来ると考えた」とある点から、5の「ヨーロッパの藝術も…はかなさを模索している」は真逆の内容になる。